

ジュニアスポーツ教育学科10周年記念リレー講演会報告

「オリンピック・パラリンピアンとともに考える、スポーツの力」

中瀬古 哲

はじめに

ジュニアスポーツ教育学科が10周年を迎える節目に、大学の広報も兼ねたオリンピック・パラリンピアンによるリレー講演を企画・実施した(2018年6月～9月)。取りかかりが遅かったため、日程調整や会場確保をはじめ広報の仕方等不十分な部分も多々あったが、以下、講演会の概要について報告する。

I 10周年記念リレー講演趣旨

発達教育学部・児童教育学科を母体とし、「体育嫌いをなくそう」というスローガンのもと2009年に発足したジュニアスポーツ教育学科が、今年で10周年を迎えた。発足後間もなくの2013年には「スポーツ基本法」が制定され、“権利としてのスポーツ”が明文化され、2年後の2020年にはスポーツの祭典であるオリンピックが東京で開催される。

「する」にしても「観る」にしても、スポーツは私たちの身近にある。今や人間の発達及び社会の発展は、良い意味でも悪い意味でもスポーツ抜きには語れない。体力の向上や健康の維持・増進、子どもの発育及び社会的発達への貢献が期待される一方で、体罰やしごき等の暴力的体質が社会問題となっている。また、平和運動としてのオリンピック・ムーブメントが商業主義や国家主義の影響を受け、“プレーヤーズ・ファースト”とはほど遠い現実も報告されている。スポーツの価値やその機能について多角的・多面的に深く掘り下げる研究、また確かな知識としなやかな感性を

持った指導者の養成という社会的な課題は、今後ますます重要になっていくと考えられる。

当然のことながらジュニアスポーツ教育学科もその役割を担う大学の1つである。スポーツの新たな動向を踏まえて、スポーツ科学研究・教育に携わる大学として何を発信すべきか、何が発信できるのかを、学科開設10年という節目の年に改めて考えるべく、今回のリレー講演を企画した。

全体のテーマは、「オリンピック・パラリンピアンとともに考える、スポーツの力」とした。オリンピック・パラリンピックの出場経験者(選手或は指導者)を講師として招き、スポーツの価値と可能性並びにそこでの課題について考える機会を設けることとした。大枠として「子どもの人間形成に資する教育的なスポーツ」と「勝利を義務付けられたトップアスリートのスポーツ」の区別と関連を明らかにし、そこから見えてくるスポーツ本来の姿を浮き彫りにすることをめざした。

II 講演内容

1. 講師選定とテーマの設定について

上記の趣旨に加え、①地元兵庫県との関係、②現代スポーツの課題、③女性の視点、を加味し、4名の講師と個別の講演テーマを設定した。講師の選定・依頼については、美齊津二郎氏(オフィス・ミサイズ)の協力を仰いだ。

最初の講師は、日本初的女子バレープロチーム「ビクトリーナ姫路」のジェネラル・マネージャーである眞鍋政義氏。眞鍋氏は、選手として(1988

年ソウル五輪)、指導者として(2012年ロンドン、2016年リオデジャネイロ)オリンピック出場経験をもつ。講演では、IT (Information Technology) の導入、女性アスリートの指導、プロチームと地域(姫路)の活性化、等についての情報提供をお願いした。

二人目は、アイススレッジスピードレース(1999年長野冬季パラリンピック)と車いすマラソン(2004年アテネ夏季パラリンピック)とで金メダリストとなった土田和歌子氏(夏冬両方は日本初)。土田氏は、2008年北京パラリンピックのレース中にアクシデントで大怪我(2か月の入院)するも不屈の闘志で現役復帰。子育てと競技の両立をめざす女性トップアスリートである。講演では、障がい者スポーツの現状と課題、超ポジティブ思考の秘訣、女性アスリートとしての在り方等に加え、オリンピックに比べてどうしても影の薄いパラリンピックの広報にもなればとの思いを込めた。

三人目は、競泳オリンピックで、JOC オリンピック・ムーヴメントアンバサダー、ラグビーワールドカップ2019ドリームサポーターとしても活躍中の伊藤華英氏。伊藤氏は、女子選手の思春期(恋愛)問題や生理と競技の関係等女性アスリートならではの視点も含め、多様な視点から多くの情報を発信している。“美しく・しなやか”をキーワードに女性の自立という視点からの問題提起を期待した。

表1. ジュニアスポーツ教育学科10周年記念
リレー講演会の講師とテーマ

回	講師	テーマ
1	真鍋政義	地域の活性化とスポーツ ―プロ・スポーツチームができること―
2	土田和歌子	障害者の社会進出とスポーツ ―パラアスリートの現実―
3	伊藤華英	目標達成できるメンタルコントロール ～美しく、しなやかに～
4	井村雅代	女性スポーツの指導―英国・中国・日本 ナショナルチームの指導を通して―

最後は、学科立ち上げの際の記念講演においてもお世話になった、シンクロ改めアーティスティックスイミング日本代表の現役ヘッドコーチ

井村雅代氏。リオ五輪の報告を中心として、英国・中国・日本での指導経験から見てくるスポーツ教育の課題を語っていただくことを要請した。個別の、テーマは、表1の通りである。

2. 講演の概要

(1) 真鍋講演(2018年6月16日/三宮サテライトキャンパス)

第1回目の真鍋講演においては、「オリンピック・パラリンピアンとともに考える、スポーツの力」というメインテーマのもと、姫路を日本初の女子バレーボール・プロチーム設立の地に選んだ理由、女性アスリートのチームづくりの秘訣等が語られた。

データ・バレーの先駆者として有名な真鍋監督だが、「カリスマ監督にはなりたくない」という信念のもと、他のスタッフと共同し、選手一人ひとりの個性を見極めつつ丁寧に徹底的に対話するという指導体制が、世界に通用するチームを創ったということが語られた。

マスコミにおいては、日本スポーツ界の悪しき体質ばかりがクローズアップされる昨今であるが、スポーツの素晴らしさと指導者のあるべき姿が具体的に提示され、スポーツ指導者の養成を本務とする本学科の意義と課題をあらためて確認することができた。

参加者からは、「中学校のバレーボール部の顧問として、本日の講演内容は自分のモチベーションアップにつながった。」「真鍋氏のプラス思考を参考にしたい。」「指導している学生にも、本日の講演内容を聞かせてあげたい。」等の感想があった。

(2) 土田講演(2018年7月7日/三宮サテライトキャンパス)

土田講演は、開催予定日が、西日本豪雨と重なり中止を余儀なくされた。多忙な土田氏のスケジュールとリレー講演というタイトなスケジュールのため日程調整がままならず、年度内の代替講演の開催を断念した。

(3) 伊藤講演（2018年 8 月26日／鈴蘭台キャンパス）

伊藤講演では、「目標達成できるメンタルコントロール～美しく、しなやかに～」というテーマのもと、自身のアスリートとしての生きざまと学びの履歴を紹介しつつ、その経験やその後の研究を踏まえて、挫折や困難を乗り越えるためのメンタルコントロールの必要性和方法等が実技も交えて語られた。

伊藤氏は、健康づくりのため3歳の頃から水泳をはじめ、小学生の頃から頭角を現したという。一旦勉学のため練習から離れるが中学から再開、記録を伸ばし続け国内大会で数々の優勝を達成。しかしながら、絶対本命といわれた2004年アテネオリンピックの国内選考会で3位となり（2位までが出場）惜しくも出場を逃す（当時19歳）。この経験＝挫折が、責任感を自覚した本当の意味でのアスリートとしての出発点であったという。また、この頃から「実力があるがメンタルが弱い」と言われるようになり、その克服がその後の研究テーマ（メンタルタフネス）にも繋がったという。

将来を見通した具体的な目標を設定すること（短期－中期－長期）の重要性和方法、目標達成のためには、事前の準備、コンディショニングづくり、ポジティブな見方・態度、等が必要であることが語られた。メンタルもトレーニングすれば強くなるものであり、自分は弱いと感じている選手（人間）も、強い選手（人間）になれるということが強調された。

(4) 井村講演（2018年 9 月 8 日／鈴蘭台キャンパス）

井村講演では、「『できない』から逃げるな！～努力するから楽しくなる」というテーマのもと、日本のみならず、中国、英国でのコーチの経験も踏まえ、若いアスリートの本気を引き出し、それを発揮できる環境づくりの必要性和秘訣が語られた。

井村氏は、1984年ロサンゼルス大会にむけて日本代表コーチに就任し、2004年アテネ大会の

退任まで、多くのメダリストを輩出した。退任後、中国や英国でもコーチを務める（国内では激しい心無い批判や中傷があったという）。その後、乞われて再び日本代表のコーチに復帰（2014年）。その時、「チームワーク」や「絆」の意味をはき違えた、横並び志向の強い日本選手の気質に驚いたという。選手たちの能力と無限の可能性を開花させるためには（＝メダル獲得）、選手が今まで経験したことのない努力と達成感を味合わせるために選手を徹底的に「追い込む」ことが必要であること、また、そのためには選手を納得させる合理的で人間味あふれる丁寧な指導が不可欠であることが強調された。メダル獲得のための準備（＝できるようになる）には、当然それ相応の練習量が求められる。その一方で、選手が、能動的に練習に取り組むために、練習の意味を伝え、日々の具体的で達成可能な課題を意識させる（1ミリだけ前進する）、指導者は多くを語らない（＝指導者の自己満足）等、徹底的に選手目線で指導法を模索してきたことが語られた。「追い込む」「練習量」の部分がクローズアップされ、“スパルタ的”と表現されることが多い井村氏であるが、選手の力を信じ、選手との双方向のコミュニケーションを成立させ、指導者の意図を正確に伝えるために、指導方法を模索し続ける真摯な姿勢が伝わってきた。そして、そのためには自分自身が変わることも厭わない指導者としての謙虚な姿勢こそが大切で、だからこそ指導者は選手以上に努力しなければならないという。その点こそが、選手を育て、メダル獲得を可能にした井村コーチ術の重要な側面であることを痛感させられた講演であった。これは、「メダル獲得」という大きな目標だけでなく、「都道府県大会1回戦突破」のような身の丈に応じた目標を掲げる部活動の指導者にも同様に当てはまるであろう。

井村氏は、日本とのライバルである中国チームのメダリストを育てあげた。そのこと自体に対する批判も多かったという。さらに、その育てた中国の愛弟子と本気で闘うことに何も感じないのかとの質問に対しては、一切の迷いや複雑な思いは

存在しないと強調された。なぜならば「スポーツだから」と明るく。いったん勝負が終われば遺恨を残さない。それがスポーツ本来の姿なのだという信念が伝わってきた。

オリンピック・ムーブメントの本質は、"国家の利害を乗り越え世界が一つになること"にある。国境を超えメダリストを生み出した井村氏の活躍・生き様は、まさにオリンピック・ムーブメントそのものであり、「スポーツの力」を象徴するものではなかろうか。

講演後、活発な質疑応答もあり、最終回にふさわしい有意義な講演会となった。

おわりに

以上3名のオリンピックによる講演を実施することができた。どの講演からも、スポーツにおいて勝ち抜く（メダルを獲得する）ためには、1）目標とそれを具体化するための具体的課題と道筋を明確にする、2）昨日以上の負荷と努力と成功体験（できる喜び＝達成感）が不可避に求められる、それを成し遂げるために、3）選手は自分自身を、指導者は選手を、厳しく追い込まねばならない、4）選手は、やらされているのではなく、選手自身が能動的・主体的にならねばならない、5）指導者は、選手の自覚と主体性形成のため、双方向コミュニケーションを心がけ、丁寧に意味と科学的根拠を語り続けねばならない、そのために選手以上の努力と自己変革が求められる、ことの必要性和意義が強調されていた。「勝利を義務づけられたトップアスリートの指導」と「子どもの人間形成に資する教育的指導」を、単純に同一に語ることは慎まねばならないであろうが、スポーツの教育力の或は魅力の本質はこのあたりにあるのではなかろうか。今後も、スポーツの第一線で活躍する指導者や選手から学ぶ機会を設け、スポーツの価値と教育力を解明する努力を継続していくことを課題としたい。

最後に、多忙な中、急な要望にも関わらず講演を快諾してくれた講師、準備に奔走し講演を支えてくれた教職員のみなさんに心より感謝の意を表し

筆をおきたい。ありがとうございました。